



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第62回日本手外科学会 学術集会を振り返って

岩崎 倫政

(北海道大学大学院医学研究院
機能再生医学分野整形外科学教室)

目次

- 第62回日本手外科学会学術集会を
ふりかえって
- 日本手外科学会名誉会員に推挙されて
- 日本手外科学会特別会員に推挙されて
- 手外科温故知新(「手の日」制定の件)
- 第11回手外科のリスクマネジメント
- バトンリレー (第5回)
- Joyの声 (第2回)
- JSSH-HKSSH Traveling Fellow報告記
- 日本手外科学会関連のお知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

第62回日本手外科学会学術集会を本年4月18日(木)、19日(金)に、札幌コンベンションセンターにて開催させていただきました。北海道札幌での開催は、北大整形外科同門である石井清一先生(当時札幌医大整形外科教授)が1993年(第36回)に開催して以来2回目ではありますが、北大整形外科学教室が本学術集会を開催するのは、今回が初でありました。本学術集会会長にご指名していただいた後、約3年をかけて教室ならびに同門会をあげて準備を進めてきました。この間、多くの本学会会員の皆様に多大なご協力、ご支援をいただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

学会のメインテーマは、北大の建学精神にちなみ“*Be Ambitious, Be Innovative*”とし、サブテーマとして“運動器外科学としての手外科”、“手外科領域におけるニューフロンティア”、“若き手外科医の飛躍”を掲げました。これらのテーマに沿ったトピックスを中心に講演、シンポジウム、パネルディスカッションを組みました。さらに、独自の企画として若手医師を対象としたベストペーパーアワードと指導者層を対象としたベストスーパーバイザーアワードを設けました。これらの企画が、本学会の将来を担う若手ならびに中堅指導者層のさらなる飛躍の糧となりモチベーションの向上に繋がることを強く願っております。

基礎研究を基盤としたサイエンスの発展なしに、臨床現場において革新的医療は生まれません。本邦の手外科の国際的プレゼンスを向上させるためには、基礎研究ならびに臨床への橋渡し研究のさらなる発展が不可欠であります。そのような思いから、学会のプログラム構成ではこれらの研究

色を強く打ち出しました。本学術集会が、研究の担い手である若い世代を中心とした会員の皆様に、サイエンスの重要性を改めて啓蒙する場になったことを祈願しております。

本学術集会では800題に迫る多くの一般演題応募がありました。学術集会の成否は、いかに多くの質の高い研究演題が発表されたかにかかっております。数年後、本学術集会で発表された演題が一題でも多く英語論文としてトップジャーナルにpublishされていることを、楽しみにしております。

最後になりますが、フロンティア精神あふれる札幌の地で、第62回日本手外科学会学術集会を開催できたことを教室員ならびに同門会員一同、たいへん光栄に存じます。1,700名を超える多くの先生方にご参加していただき、心より感謝申し上げます。

新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

名誉会員：金 谷 文 則



今回、日本手外科学会名誉会員に御推挙頂き、2019年4月17日の日本手外科学会代議員総会にて名誉会員証を授与して頂きました。誠に光栄であり、会員の皆様には心から御礼申し上げます。新潟大学の同門としては故河野左宙名誉教授、故田島達也名誉教授、渡辺好博名誉教授、茨木邦夫名誉教授、吉津孝衛新潟手の外科研究所前理事長、柴田実名誉教授に次いで7人目と思います。1978年(昭和53年)新潟大学を卒業し、田島達也教授が主催されていた整形外科講座に入局いたしました。1978～1987年の9年間に9カ所の病院で様々な新潟大学同門の先生にご指導を受けました。一通りの整形外科(今から思えば入門レベルですが)を学んだと考え手外科・マイクロサージャリーの習得のため留学を考え、1987年(昭和62年)7月～1988年12月 当時の手外科・マイクロサージャリーのメッカであるLouisville Hand Surgeryに research fellowとして勤めました。1年半で3編英語論文を執筆してresearch fellowを終了し、その後50倍の面接試験を受けてclinical fellowになりました。当時のresearch fellowの給料は月\$2700で、家族4人で贅沢しなければ何とか暮らせる金額でした。仕事のメリハリははっきりしており、忙しい中にも充実した生活を過ごしました。学会出張は年2回許可され、その他学会発表があれば何回でも学会出張ができたので年に6回は発表し、家族で旅行していました。1988年シアトルで採択率20%のアメリカ手外科(ASSH)・マイクロサージャリー学会(ASRM)があり、どうしても1題は通したいと考えてASSHに1題、ASRMに4題応募しました。結果として5題全て採択され、ASRMでは見開き4題が全て私の発表になり、私よりもmedical writerが驚いていたのは良い思い出です。

1991年(平成3)年2月から琉球大学に講師、1992年4月助教授に昇任し、2000年4月から教授となり2014年4月日本手外科学会学術集会を沖縄で開催させて頂きました。AOTraumaでは役員を務め、Hand courseを担当し、2012年より上肢と手外科のanatomical specimen courseを1年毎に開催しています。国内外の大学や研究機関と共同研究を行い琉球大学大学院医学研究科整形外科講座からは32名の大学院生が卒業して学位を取得し、うち5名は学長賞を受賞しております。手外科のなかでも上肢先天異常の治療は私のライフワークであり、先天性橈尺骨癒合症の授動術を開発し国内外でデモンストレーションを行っております。退職前は琉球大学整形外科の教授室から東シナ海を眺めておりましたが、今は沖縄リハビリテーション福祉学院の院長室から中城湾・太平洋の眺望を楽しんでおります。今でも沖縄で診療を続けており、手術数は退職前より増えております。引き続きご指導・ご支援の程お願い申し上げます。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会特別会員に推挙されて

日本大学病院 長 岡 正 宏



この度は日本手外科学会特別会員に御推挙いただきまして、誠にありがとうございました。お世話になりました名誉・特別会員・役員・代議員・会員の皆様に深謝申し上げます。

私は昭和53年に日本大学医学部を卒業後、整形外科に入局しました。当時は3年目から研究班に所属することになっており、神経班に入りました。整形外科専門医を取得した頃に、教授から「手の外科」を勧められました。しかし、その直後、昭和60年7月に日大板橋病院から、その頃大学病院の分院であった伊豆の日大稲取病院に半年間出張しました。患者数が比較的少なかったため、津下先生の手の外科の実際とKaplan's Functional and Surgical Anatomy of the Handを通読する時間がありました。その後駿河台日本大学病院で本格的に手外科に取り組みました。

恩師佐藤勤也先生の専門であった、電気整理学的検査のため筋電図室が自室のようでした。当時は筋電図室には医師しかおらず、筋電計も自分で操作していました。電気生理学的検査は今では一般的な検査となり、検査技師が行っています。これまでの経験を振り返って予測すると、20年後には診断・治療はすっかり変わっていると思います。今後医師の働き方改革を進めるためにはタスクシフティングが必要です。手外科医は手の治療・手術に専念すべきで、手外科に関係ある職種とのチーム医療がさらに望まれます。

手外科学会の先生方には大変お世話になりました。学会では多くの質問を受け、また質問もしましたが、記憶に残る瞬間がいくつかあり、その時の状況が鮮明に甦ります。手の外科を志した当時は専門性を追求することこそ重要であると考えていました。国民目線・患者目線で正しいかどうかは、それほど考えていませんでした。最近は管理の仕事で他の診療科の情報を知ることとなりました。医学の進歩の速さに驚くとともに、外部から眺めることにより、新しいアイデアが浮かびます。専門性はもちろん大事ですが、多様性の果たす役割について身をもって体験しているこの頃です。

日手会ではいくつか委員会に参加しましたが、最初にお手伝いしたのは用語委員会でした。委員長を託された佐藤勤也先生が駿河台日本大学病院で委員会を開催しました。当時私は委員ではありませんでしたが、事務仕事をするようになりました。平成6年から日手会用語集の改定のため、用語委員会委員長 佐藤勤也先生、担当理事 上羽康夫先生、顧問 田島達也先生 小林 晶先生、委員の平山隆三先生、藤巻悦夫先生、木野義武先生、斎藤英彦先生、関口順輔先生、山中健輔先生のメンバーで約4000語を5回の委員会で一つ一つ検討してくださいました。この間プリントからデジタルデータの整理を担当しました。その作業は膨大でしたが、委員会で諸先輩が討議なさる内容は私にとっては大変勉強になり、大変貴重な時間をお供できたことを感謝しています。

今後も手外科の診療を続け、学会に多少なりともお役に立てればと思っています。学会の益々のご発展を祈念しています。

日手会温故知新VI： 令和時代に「手の日」がなぜ必要か

名誉会員：上 羽 康 夫（京大 昭35年卒）

名誉会員：石 井 清 一（北大 昭36年卒）

名誉会員：生 田 義 和（広島大 昭37年卒）

平成31年は4月で終わり、5月1日からの年号は「令和」と改められた。年号が変わる直前の平成31年4月17日（水）に札幌市では加藤博之理事長・岩崎倫政会長らによって第62回日本手外科学会（以下、日手会と略す）代議員会が開催され、そこで生田義和名誉会員の提案である「手の日」創立案が承認された。此の時期に「手の日」創立が何故必要なのかをもう一度考えてみよう。

往年の日手会員諸兄・諸姉は記憶されている筈だが、1994年（平成4年）の第37回日手会々長であった生田義和はその学会直後に「手の日」設立を提案したのであるが、諸般の事情によりそれを実現するに至らなかった。だが、第36回日手会々長であった石井清一および第35回日手会々長を務めた上羽康夫らはいつの日か我が国に「手の日」が設立されるのを長年待ち望んでいたのである。令和時代にはIT革命が更に進化するから新時代の初年度に「手の日」が設立できれば最善だとの意見に奇しくも一致していた。記念日の設立には種々な配慮を要するが、少なくとも下記の4点は必要条件であると考える。

- 1) 「手の日」は誰のための記念日か？：人類が二足歩行を始め、両手で道具使用が可能となり、投げ槍や弓矢を使って狩猟を行い、鋤や鎌を使って農業を行うようになった。産業革命時代以降は機器を使い船舶、汽車、自動車、飛行機、ロケットなどを造るようになった。現代社会ではIT革命が進み、日常生活でもパソコンやスマートフォンなどが普及し、手を使う機会が一段と増加した。現代では第一次産業は言うに及ばず、第2次・第3次産業界においても頻繁に手を使用し、効率良く生産能力を高めている。現代社会における手の重要性は十分に認識されているが、一般人は日常生活の中で手の重要性を実感することは殆どない。最大の原因は手の機能が余りにも素晴らしく、心のままに動く手を殆ど無意識に使っているからだろう。丁度、私達が毎日空気を吸って生活しているのに、空気の有難さを実感していないのに似ている。損傷されて手が使えなくなった時、初めて手の有難さを知り、手の重要性を再認識するのです。職場で手を使用する人達、例えばIT器機を使う事務員、道具を使う大工・左官屋、筆や楽器を使う画家・演奏家などは常に手の重要性を実感し、感謝しているだろう。従って、人々が年に一度だけ「手」に感謝する日があっても不合理ではないでしょう。手の機能と障害に深く関わる手外科医が率先して「手の日」設立を提唱するのも妥当でありましょう。ただし、「手の日」はあ

くまでも日本人全員が「手」に感謝する日であり、手外科医のための記念日ではないことを十分理解しておくべきであります。

- (2) 日本医療界への手外科アピール：我が国においては手外科の特殊性・重要性が未だ十分に理解されていない。手外科は第二次世界大戦直後の1946年に米国で誕生し、1957年に我が国に導入された比較的歴史の浅い医学領域である。手外科領域と同様に比較的狭い領域を対象とする専門分野でも、眼科や耳鼻科は長い歴史を持ち、社会的にも知名度は極めて高い。更に医学界では心臓・肺・消化器などの生命維持に直結する分野は重視されている。特に、外科領域ではその傾向が著しい。それに反し、生死に直接関与しない手外科はやや軽視される傾向にある。然し、現在のIT社会で生活を維持するには手は不可欠と言えましょう。心臓・肺・胃腸などの生命維持器官と同様に現代人が生きて行くための重要な器官です。手の小さな筋腱や細い神経・血管を修復する高度な手術を手外科医は行っています。技術面でも他の外科分野と同等の修練を要するのですが、未だ知名度は低いです。「手の日」に手の重要性をアピールし、手外科の特殊性・重要性をアピールする良き機会になるでしょう。
- (3) 手の障害予防を推進：近頃の若い人達がスマートフォンなどのIT器機を手指で荒っぽく操作するのを見ていると、近い将来に手指の深刻な障害が多発するのではないかと懸念します。そのような事態が起これぬよう正しい手指の使用動作を考案し、指導するのも手外科医・ハンドセラピストの重要な任務であると考えます。令和時代には手の重要性は更に高まり、手の障害も更に深刻となりそうですが、「手の日」には手指の正しい使用法や障害治療法についての講習会も開催できるでしょう。
- (4) 「手の日」設定に関わる“Hand”と「手」の概念：一年のどの日を「手の日」に設定にするか具体的に考える時、英語“Hand”と日本語「手」との間に概念の差異があることに留意すべきでありましょう。“Hand”は欧米に伝わる解剖学的用語であり、心臓heartを中心とした人体部位を規定する用語の一つであります。“Hand”は心臓から上腕・前腕を経て上肢の最末端に付く小器官と規定されています。他方、「手」は古来中国よりの概念を引き継ぎ、一般的には肩から以遠の上肢を意味する語であります。「袖に手を通す」とか「別れに手を振る」とかに使われる手は上肢全体を意味します。「別れに手を振る」の手では、心を込めて精一杯肩と腕を大きく振る動作を意味し、手先だけを動かす「おいで、おいで」や「バイバイ」の動作とは全く違います。現在、私達が使っている「手」は狭義語であり、欧米から解剖学を導入した時に上腕arm、前腕forearm、手handに対応させた解剖学用語として正式に採用されたものでしょう。兎も角、医学的用語としては手関節より末梢の部位が現在は「手」と呼ばれていることは確かです。けれども、人間の手の系統発生や上肢機能の立場より考える時、手を上肢の先端に付く附着物と考えるのではなく、手の機能を高めるために前腕や上腕が造られたと考えるほうが妥当であります。機能学的観点からすれば手が上肢の中心であると考えべきです。「手の日」が設定されても“Hand day”ではなく我が国古来の概念をも含んだ含蓄のある日本の「手の日」であって頂きたい。いずれにしても日本に関連深く、覚え易く、しかも納得できる日として皆様に愛されるよう期待している。

第11回 手外科医のリスクマネジメント

日 高 典 昭

大阪市立総合医療センター

梁瀬先生から引き継いで本コラムを担当することになりました。私は、梁瀬先生が長年にわたって委員長を務められてきた大阪府医師会医事紛争対策委員会の一委員です。この委員会は、医事紛争が発生した場合に、医学的な検討をもとに迅速な解決を図ることを目的とした機関であり、整形外科では年間30～60件程度の事例を取り扱っています。事例の担当が決まったら、提出されたカルテや画像をじっくり読み込み、主治医や院長、事務担当者などの病院関係者と面談を行って、対応方針を検討します。術前から想定されていた合併症の場合は、裁判となっても医療側が敗訴となることはあり得ませんが、何らかの過失を認めることが免れない場合は、一定金額を支払って示談や和解に持ち込む作戦で臨むこともあります。私が担当した事例には、正確な側面像を撮影していなかったためにDIP関節脱臼を見逃した例や、整復位を喪失して掌側プレートが浮き上がったために長母指屈筋腱皮下断裂をきたした橈骨遠位端骨折の例、長時間の腹腔鏡手術後に生じた腕神経叢麻痺の例などがありますが、すべて示談や和解として処理されており、その性質上、詳細を記載することができません。ただ、こうした事例に一般的に言えることは、カルテの記載がきわめて不十分で、事実関係を立証することが困難な場合が多いことです。会員の先生方には日頃から、「どのような考えのもとにその治療法を選択したか、不慮の合併症に対してどのように診断・評価して対処したか、また患者ならびに家族にどのように説明し、どう反応したか」など遅滞なく記載しておくことをお勧めします。また、不幸にしてmalpracticeとなった症例でも、後医が見事なrecovery shotを打ってくれたときは、円満に解決することが多いようです。会員の先生方の腕の見せ所と思われまますので、よろしくお願いたします。

今回、紹介する事例は、心臓弁を機械弁に置換し継続的にワルファリンを服用していた86歳女性が、出血性大腸ポリープに対して内視鏡手術を受けた3か月後に貧血の進行を呈したためにワルファリンの中止を指示されて入院し、1週後に大腸内視鏡検査を受けた翌朝に心原性脳塞栓症を発症し、半年後に死亡したというものです。家族は抗凝固剤を中止したことに過失があったと主張して損害賠償を求めましたが、裁判所は、医師が血栓塞栓症発症のリスクより出血のリスクを重視してワルファリンの投与を中止したことに過失はないとして請求を棄却しました(大阪地裁、平成29年12月5日判決)。

外科医にとって周術期に抗血栓療法を中止するか否かは悩ましい問題であり、中止した場合のリスクとベネフィットを個々の症例で検討する必要があります。手外科手術において生命に関わる大出血をきたすことはまずありませんが、術後血腫の形成により神経の圧迫や腱の癒着、コンパートメント症候群など機能的に不良な結果をもたらすこともあり得ます。海外論文の多くは中止しないことを推奨していますが、その背景には日本人が「がん」を恐れる以上に、欧米人は動脈硬化を基盤とする血栓性疾患を恐れるという風潮も影響しているようです。しかし、私自身もアスピリンを中止して手根管開放手術を施行した約1週後に軽い脳梗塞を発症した症例を経験しましたし、今後は手外科手術における抗血栓療法の中止の是非についての日本人データを集積して検討していく必要があると思われまます。

手外科バトンリレー (第5回)

私とハンセン病による麻痺手

特別会員：橋 爪 長 三

1945年(昭和20年)8月15日は誰でも忘れることの出来ない、日本が敗戦となった日です。私はその時、旧制中学4年、最も多感で純粋な年ごろで敗戦前までは国のため、天皇のために命をすてるのが最も美德と考えておりましたので敗戦による絶望感はあまりにも大きいものがありました。それ故間もなく再開された中学における勉学においても希望もなく雑然としたもので、ただ親の指示で商店であった家の手伝いをしているだけでした。しかし中学5年卒業頃よりいつまでも家業の手伝いや食料不足を補うために畑仕事をしていても希望が見えて来ない状態が続き、鬱々とした感情も社会の変化や学科以外のいろいろな書物を読むうちに次第に変わり、人生とは何か。何のために生きているか。如何に生きるべきか。という問題に直面し、生まれてはじめて真剣に考えるようになりました。そして両親の勧めもあり昭和23年、1年遅れて新生高校3年に編入し、そのころ急速に変化しつつあった現実の社会に関する書物ばかりでなく、特に古典といわれる書物を読み、親しい友人ともよく議論しているうちに、“人間として最も正しく生きようとするならば、普通の人の真似をしているだけではいけない、人がやりたくないと考えている仕事をしなければならない。”と考えるに至りました。そしていろいろと調べた結果、その中の一つにハンセン病(昔はらい病といわれ、最も恐れ、忌み嫌われた病気の一つでした)という病気があり、この病気のため苦しんでいる患者さん達の中にはいつか働くこと、とくに医師として働くことがもっとも有意義な生き方だということが分かりました。これは私にとって大変な発見でした。それ以来、この考えに取りつかれたようになり、そのため昭和24年、近くの松本に出来た信州大学医学部に入学、3年生の時、思い切って当時知られていた国立療養所長島愛生園園長光田健輔先生に手紙を書き見学をお願いしたところ、間もなくお返事をいただき、是非島に来るようにとのことでした。そして夏休みに見学に行き患者さん達に会ったところ、かつて私の小学生だった頃、しばしば遊んで居た町役場の庭で、母がいたく同情していた2人の乞食の曲がった手指、歪んだ顔の人達とそっくりの患者さんを何人も見かけ驚かされました。その際、外科の医師からはいろいろ説明をしていただきましたが、“手足が麻痺し変形と不自由のため患者さんは非常に困っている。患者さんの治療のためには是非整形外科の勉強をしてから愛生園に来なさい。”と勧められました。ここではっきりと卒業後は整形外科をすることと決心し、インターン、国家試験終了後、昭和31年新設の整形外科教室に入局、故藤本憲司教授の下で整形外科の勉強をすることとなりました。その後、7年間教室に残り基礎と臨床とを研究しておりましたが、長島愛生園へは毎年、夏必ず出かけているなど愛生園と私との関係は深くなってまいりました。このようなことをしているうち両親は何となく感じていたようですが、医師となって6年位してからでしょうか、当然両親の許可を得なければならない

時期となりましたので反対されるのを覚悟の上、両親に正直に話し私にハンセン病療養所で働くことを許してほしいとお願いしました。その結果、父は“親不孝者”と非常に怒り、母は悲しましました。私も苦しみ悩みました。弟を除いて肉親はすべて反対でした。当分の間、両親は肉親以外の親戚、知人にさえ話すことさえ出来ませんでした。母は私が愛生園へ行ってしまったら、これからはもう二度と会えなくなるのではないかとさえ一時は思ったそうです。今では考えられないような社会の偏見でしたが、約60年も昔のこと、特に田舎でこのように考えるのは当然のことでした。次に藤本教授に許可をお願いしましたところ、教授は当初反対をしておりましたが、私の熱意をうけて下さり、しばらくして了解され、反ってしっかりやってくるようにと励まして下さいました。結局両親も諦めざるを得ず、私がハンセン病療養所で働くことを許してもらうことが出来ました。

昭和38年の1月、長島愛生園へ正式に着任しましたが、当初入所者は約1600人で、らい菌(+)の患者さんは約30%と聞いておりました。そしてこの時全く偶然でしたが、慶応大学整形外科の矢部裕先生(現慶応大学名誉教授)、が岩原教授の指示で短期間(1年足らず)手の外科の勉強のため愛生園へ着任されました。それは当時岡山大学整形外科助教授津下健哉先生(故広島大学名誉教授)、が日本の手外科のパイオニアとして盛んに手外科を研究され、また愛生園と同じ島にある光明園というハンセン病療養所へも月1回、手術に来られていたからであろうと思います。それ故、矢部先生と協力しながら愛生園で診療し、毎週金曜日には二人で津下先生の手術を見学に岡山大学へ参りました。これは私ども2人一特に手外科を知らなかった私にとりましてはこの上なくラッキーな機会でした。また矢部先生は私より知識や技術において一歩も二歩も先を歩いておられましたので、いろいろと教えていただき私にとって大変有難いことでした。そして今も親しく友人として御交誼をいただいております。岡山大学では津下先生の見事な手術を感激を覚えながら見学し、帰りのバスの中で反芻し、島に帰ってからも先生のメスの入れ方、腱、神経の剥離、展開のやり方などを事細かく記載し、頭に入れておきました。大分後になって橈骨神経麻痺の再建を映画にし、これを学会で発表しましたが、この映画を津下先生がご覧になって“私の手術のやり方に似ていますね”と感想を述べられたときには大変嬉しく、厚く感謝をもってお礼を申し上げました。矢部先生が愛生園を退職された後は私が一人で手足の外科を行ったわけですが、北は青森県の療養所から南は奄美大島にある療養所まであちこちに出張して手術を行い、中でも長島愛生園、大島青松園、邑久光明園でもっとも多く行われました。これら3施設だけで行われた麻痺手の再建は400手以上に上りました。また患者さんは島に隔離されておりましたので、調査し易い大島青松園に入所中の患者さん(当時約400人-450人位だったと思う)の7-8割の患者さんの麻痺手について筋力テストを行うことが出来たので、この結果により麻痺手の分類を行い、再建の方法を考えました、大分後になって“leprosyによる麻痺手の分類とその再建”という演題で第1回国際手学会において発表しましたが、低位正中尺骨神経麻痺が多かったものの橈骨、正中、尺骨神経麻痺の高位及び低位麻痺のすべてといてもいいほどの麻痺の組み合わせが見られたと言っても良いでしょう。私はハンセン病療養所で昭和38年以来、12年間、毎日医師として働いておりましたので麻痺手を手術する機会が多く与えられ麻痺手とはどういうものか、そして再建するにはどのようにしたらよいかということが少しずつ分かるようになってきました。以上のほかここでは述べませんが麻

痺足に対する手術も大勢行いました。主として腓骨神経麻痺による下垂足、内反尖足、シャルコー関節、それに足底潰瘍などで、勿論脛骨神経麻痺も見られました。これらの疾患から多くの教訓をあたえられました。

昭和49年大島青松園を退職、県と信州大学との強い要望により新設の長野県身体障害者リハビリテーションセンターに転任したのですが、長野県ではあまり手術治療が行われていなかった疾患、分娩麻痺、脳性麻痺、脳卒中後遺症、先天異常による手足の障害、ポリオ、二分脊椎による下肢麻痺、手足の末梢神経麻痺、脊髄損傷、特に頸髄損傷により四肢麻痺など様々な疾患、障害を治療する機会が与えられました。そしてこれらの疾患に対する積極的治療は教科書にはあまり詳細、かつ具体的には書かれてありませんでしたので自分で治療方法を考えなければならぬことがしばしばありました。このような時役に立ったのは12年に及ぶハンセン病診療所での診療経験でした。ハンセン病による手足の麻痺は運動、感覚両者の広範囲の麻痺であるため治療上非常に難しいところがありますが、患者さんはよく私の説明を聞き納得、協力してくださったので大変助かり感謝でした。麻痺手に関しては昭和38年長島に住んでから1年足らずの間、広島大学教授になれるまでは津下先生にしばしばご指導をいただき、後に共著としてくださった論文もありましたが、そのほかはほとんど自分一人で考えながら手術を進めていかなければなりませんでした。以上が凡そ私とハンセン病による麻痺手に関しての僅かな治療経験の概略について述べましたが、昭和38年から12年間ハンセン病療養所での麻痺手、麻痺足の治療上の知識と技術とが、その後リハビリテーションセンターで障害者の治療をする上で非常に役に立ち、比較的抵抗なく治療を進めることが出来ました。

さてここでは医師としての仕事についてしか書きませんが、実はこのほかに人格的、精神的に患者さんとのつながりが深くあり、まだ青年であった私にとりましては何人も立派で謙遜な深い考えをもたれた方に会うことが出来、このことも忘れてはならないと感謝しております。

Joy の声 (第 2 回)

林 原 雅 子

鳥取大学整形外科

堀井恵美子先生から日手会ニュースJoy(女医)の声(第2号)投稿のバトンをいただきました。本年度から過疎地域・女性医師問題を担当する委員会としてキャリアアップ委員会が創設されました。わたくしは人口が一番少ない鳥取県に勤務しておりますが、女性医師であるとともに手外科専門医が自分を含め2名という超過疎地域でもあり、皆様にはご心配をおかけしているところです。堀井先生からのバトンリレーであり、非常に重く感じておりますが貴重な経験であり当県の問題に向き合う良い機会かと思えます。

①私が手外科医専門医を取得するまで

整形外科入局時の自分の指導医が今の上司でした。私の上司はほぼ一人で研鑽をつみ、頸部の再建なども行っておりました。実際に手外科を始めたのは大学院へ進学してからですが、リウマチの転倒(研究テーマ)と手外科を中心とした臨床に追われました。その後専門医制度ができましたが、当県は0人であったため、上司が1年間他県の専門施設へ研修に出てようやく取得、当院が研修専門施設として認定されました。自分の専門医取得の問題はちょうど専門研修期間が2年から3年に延長となるときに上司が転勤となったことです。7か月足りないため、その間はなんとか週1回指導にきていただき試験資格を取ることができました(試験も何とか…)

②手外科女性医師として

育児など仕事以外で頭を悩ますイベントはなく(そのような余裕もなく)、仕事上降りかかってくることをあくせくとやっていくうちにここまで来ました。手外科医は緊急手術が多く、女性にとっては結婚・育児となると厳しいだろうという風潮でしたので、上司も私が手外科医を目指すとは本気で思っていなかったようです。しかし手外科にも女性医師は必要です。人口の半分は女性であり、高齢化とともに女性の割合も増加します。手外科疾患(外傷は除く)はRAも含めて比較的女性の割合が多く、我々女性医師の活躍する場は十分あると思います。また手外科治療は座ってできて、小手術が多く、自家麻酔もある程度可能です。体力や時間の制限を設けざるを得なくなったときに、やめることなく自分が可能なペースで継続することができうるのではと思います。

③手外科医の地域偏在 - 当地域で手外科医を増やすために -

当県は現在専門医が2名しかいません。実際には数名の手外科をされている諸先輩方が専門医取得されなかったことも原因の一つです。そうはいつでも自分に続く後輩を増やし、専門医になってもらうことが一番の課題です。上司が手外科グループラインを作ってくれ、症例の相談や招集連絡

を行いやすくなりました。難易度の高いもの、珍しい手術はラインで連絡しあい、みなで可能な限り参集し、若い先生のモチベーションの維持にもなっていると思います。また一定期間にはなりませんが、手外科(非専門医)の先生のもとで指導いただいています。

自分はRAと手外科の両方を担っており、そちらの両立及び後に続く医師の育成も今の課題のひとつです。最近手外科医として活躍されている素敵な女性の先生方(先輩も後輩も)にお会いする機会も増え、非常に良い刺激を受けています。自分のことで精いっぱいになっていましたが、この機会に女性医師はもちろん、後輩の育成について考えさせていただくことができました。仕事と家庭の両立などワークライフバランスについては次号以降の先生にぜひお願いしたいと思います。



JSSH-HKSSH Traveling Fellow報告記



藤原 祐樹

名古屋掖済会病院 整形外科

2019年のJSSH-HKSSH Exchange Traveling Fellowに選出いただき、日手会を代表して香港を訪問させていただきました。本稿ではその際の体験談と、それを通じて私が感じたことについて報告させていただきますと思います。

まず、渡航までのスケジュールについてですが、最終的に行き先と日程が決まったのは1月17日でしたが、3月24日より2週間の予定で香港に渡航することとなり、そのスケジュールはかなり慌ただしいものでした。いきなり2か月後に2週間仕事を休むというのは大変なことで、勤務先の同僚の先生方にはかなり無理をお願いしました。ですので、応募に際しては周囲の先生方の理解を得るということがまず重要だなと思うとともに、快く送り出してくれた同僚の先生方には本当に感謝の気持ちしかありません。

香港では私は2週間の日程で滞在しました。1週目はChinese University of Hong Kong (CUHK) のP. C. Ho教授が主催するCUHK education weekという教育プログラムに参加し、週末はHKSSHの学術集会に参加して、次の1週間で香港内の様々な病院で手術及び病院見学をさせていただきました。

CUHK education weekにはguest professorとしてM Garcia Elias教授と奈良医大の面川教授が招待されており、彼らにP.C.Ho教授も加えた強力な講師陣によるlectureを受けました。プログラムの中にはcadaver sessionなどもあり、1週間手関節についてみっちり勉強させていただくことができました。このプログラムの参加者は、ロシアからのfellowが3人、スイスからの1人に私を加えた5人で、この豪華な講師陣をこんな少人数で独占できる非常に贅沢なプログラムでした。密度も大変濃いもので、Garcia Elias教授は1週間の間に11回もlectureをされました。

HKSSHの年次学術集会は1会場で行われましたが、presentationの内容はどれも非常に素晴らしいものでした。研究内容はどれも英語論文になりそうなものばかりであり、原稿を読む演者はおらず、彼らは発表に関して非常に洗練されているなど感じました。

後半の1週間は香港内の病院を1日ごとに回って見学させていただきました。香港は非常に人口密度が高い地域で、狭い地域の中にある病院の一つ一つがだいたい100万人程度の人口をカバーしており、病院内にはどこも所狭しとベッドが並べられていました。香港ではspaceが何より貴重なのだと言った現地の先生の言葉が印象的でした。

また今回の訪問で一番感じたことですが、それは日本の諸先輩方の手外科への貢献と日手会の世界の中での存在感の大きさです。滞在中は常に「君は日本の代表として来てくれた」と言って下にも置かない歓待を受けましたが、これはひとえに先輩方の功績の上に成り立つものだと感じさせら

れました。国際委員会の先生方、勤務先の先生方はじめ様々な先生方にこのような貴重な機会を与えていただいたことを深謝するとともに、私個人としても今後の日手会の発展に少しでも寄与できるよう、日々の研鑽を積んでいきたいと思ひます。ありがとうございました。



Congress BanquetでHKSSHメンバー、中国、韓国からのguest speakerの先生方と

日本手外科学会関連のお知らせ

◆第63回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2020年4月23日(木)～24日(金)
会 場：朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター
会 長：坪川 直人(一般財団法人新潟手の外科研究所)
詳 細：<https://admedic.co.jp/jssh2020/>

.....

◆第26回春期教育研修会◆

会 期：2020年4月25日(土)
会 場：朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター
主 管：日本手外科学会 教育研修委員会

.....

◆第64回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2021年4月22日(木)～23日(金)
会 場：長崎ブリックホール、長崎新聞文化ホール
会 長：田中 克己(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 形成再建外科学)

関連学会・研究会のお知らせ

◆日本イタリア合同手外科会議◆

会 期：2019年10月10日(木)～12日(土)
会 場：フィレンツェ(イタリア)
詳 細：<https://adarteventi.com/SICM2019/JSSH>

.....

◆第34回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2019年10月17日(木)～18日(金)
会 場：パシフィコ横浜
会 長：紺野 慎一(福島県立医科大学医学部整形外科 教授)
詳 細：<https://convention.jtbcom.co.jp/joakiso2019/>

.....

◆第28回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2019年11月14日(木)～15日(金)
会 場：仙台国際センター
会 長：館 正弘(東北大学大学院医学系研究科 外科病態学講座形成外科学分野 教授)
詳 細：<http://jsprs28.umin.jp/>

.....

◆第30回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2019年11月21日(木)～23日(土)
会 場：大阪市中央公会堂
会 長：川端 秀彦(南大阪小児リハビリテーション病院)
詳 細：<http://jpoa2019.umin.jp/>

.....

◆第46回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2019年11月28日(木)～29日(金)
会 場：ハイアットリージェンシー東京
会 長：櫻井 裕之(東京女子医科大学 形成外科学教室)
詳 細：<http://jsrm46.umin.jp>

◆第34回東日本手外科研究会◆

会 期：2020年2月1日(土)
会 場：東京慈恵医科大学 新橋キャンパス
会 長：福本 恵三(埼玉慈恵病院 埼玉手外科マイクロサージャリー研究所 所長)
詳 細：<http://ejssh34.umin.ne.jp/greeting/>

.....

◆第41回九州手外科研究会◆

会 期：2020年2月1日(土)
会 場：熊本市民会館シアーズホーム夢ホール
会 長：加藤 悌二(医療法人権の葉会 かとう整形外科光の森 理事長)
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/khand/index.html>

.....

◆第37回中部日本手外科研究会◆

会 期：2020年2月1日(土)
会 場：ビッグハート出雲
会 長：内尾 祐司(島根大学医学部整形外科学教室 教授)
詳 細：<http://www.convention-w.jp/jssh37chubu/index.html>

.....

◆第32回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：2020年2月7日(金)～8日(土)
会 場：奈良市／なら100年会館 ホテル日航奈良
会 長：矢島 弘嗣(市立奈良病院 院長)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/elbow2020/>

.....

◆第12回アジア太平洋手外科学会(12th APFSSH)◆

会 期：2020年3月11日(水)～14日(土)
会 場：メルボルン(オーストラリア)
詳 細：<http://apfssh2020.org/index.php>

.....

◆第63回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2020年4月8日(水)～10日(金)
会 場：名古屋国際会議場
会 長：亀井 譲(名古屋大学形成外科 教授)
詳 細：<http://jsprs2020.jp/>

◆第32回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2020年4月24日(金)～25日(土)
会 場：朱鷺メッセ(新潟市中央区)
会 長：西村 誠次(金沢大学医薬保健研究域保健系 リハビリテーション科学領域)
詳 細：<http://meeting32.jhts-web.org/index.html>

.....

◆第93回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2020年5月21日(木)～24日(日)
会 場：福岡国際会議場・福岡サンパレス・マリンメッセ福岡・福岡国際センター
会 長：丸毛 啓史(東京慈恵医科大学 整形外科学講座)
詳 細：<http://www.joa2020.jp/index.html>

.....

◆第33回日本臨床整形外科学会学術集会 どまんなか学会 愛知◆

会 期：2020年9月20日(日)～21日(月・祝)
会 場：名古屋コンベンションホール
会 長：前田 登(愛知県整形外科医会 会長/前田整形外科クリニック)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/33jcoa/>

.....

◆第29回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2020年10月8日(木)～9日(金)
会 場：パシフィコ横浜 ノース
会 長：前川 二郎(横浜市立大学形成外科学)
詳 細：http://www.jsprs.or.jp/member/information_society/2020/detail.html?num=2

.....

◆第47回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

(第5回アジア太平洋マイクロサージャリー学会(APFSRM)との合同学術集会)

会 期：2020年11月20日(木)～21日(金)
会 場：北九州国際会議場
会 長：服部 泰典(小郡第一総合病院 整形外科)
詳 細：<http://jsrm.umin.jp/meeting/index.html>

編集後記

日手会ニュース第52号をお届けいたします。

本年度は第62回日本手外科学会学術集会が4月18日、19日札幌コンベンションセンターにて北海道大学大学院医学研究院機能再生医学分野整形外科教室岩崎倫政教授の元開催されました。思いの外気温が高く、むしろ東京より暑いくらいで、第1回広報渉外委員会が小樽で開催された時の-30度の寒波大雪の時のギャップが激しく、全く雪のない道路の照り返しを眩しく思いました。

今年は念願の「手(ハンド)の日」が8月10日に制定された記念すべき年となりました。温故知新VIで上羽康夫先生が述べられている手の日の創立がなぜ必要なのかを改めて考え直し、今後の日本手外科学会の知名度を上げるべく、日々の診療に携わって行きたいと思います。

また8月9日日本政府がハンセン病患者家族訴訟に対し控訴しないと表明し、家族の苦労をこれ以上長引かせないとする新たな展開を迎えた中、橋爪長三先生から、私とハンセン病による麻痺手という投稿をいただき、医師として12年という長きにわたってハンセン病による麻痺手の治療に当たったご苦勞、熱意に感服するとともに貴重なお投稿に心から感謝し、先人の業績を後輩がしっかり受け継ぎ今後の手の外科の発展につなげなければならないと痛感いたしました。

(文責：獨協医科大学埼玉医療センター 岸 陽子)

広報渉外委員会

(担当理事：平瀬雄一，委員長：佐竹寛史)

委員：大江隆史，大谷和裕，岸 陽子，辻 英樹，寺本憲市郎)